

近現代日本における育児行為と育児用品にみられる

子育ての変化に関する一考察

A study of changes in modern Japanese childrearing values as seen in child-care customs and accessories:
A focus on babywearing, baby baskets, baby slings, and strollers

阿部 和子¹, 柴崎 正行¹, 阿部 栄子¹, 是澤 博昭¹, 坪井 瞳², 加藤 紫識³
¹大妻女子大学家政学部, ²浦和大学こども学部, ³千代田区立日比谷図書文化館

Kazuko Abe¹, Masayuki Shibazaki¹, Eiko Abe¹, Hiroaki Koresawa¹, Hitomi Tsuboi², and Shinobu Kato³

¹Faculty of Home Economics, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

² Faculty of Child Studies Urawa University

3551 Osaki, Midori-ku, Saitama-city, Saitama, Japan 336-0974

³ Hibiya Library & Museum

1-4 Hibiya-Koen, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 100-0012

キーワード：子守服, おんぶ (紐), ベビーカー, 子育て観, だっこ

Key words : Babywearing , Baby baskets, Baby slings, Strollers, Child-rearing

抄録

本研究の目的は、「おんぶ」や「抱っこ」という身近な育児行為の変化とえじこ、子守帯、ベビーカー等の育児用品の変化と現状の検討を通して、近代日本における子育ての変化の過程を考察するものである。

「おんぶ」は、子守や家事の必要性から生れた庶民の育児法であり、その起源は、平安時代にまでさかのぼる。それが明治以降わずか150年ほどの間に「労働のためのおんぶ」から「育児のための抱っこ」へ、日本人の子育てのスタイルが変化をとげた。また明治から昭和の初めにかけて、多くの人々にとっての育児用品は日用品の代替であった。だが第二次世界大戦後、特に、欧米の情報や文化が庶民レベルまで浸透し、普及しはじめる60年代に入り育児用品は家庭で作るモノから買うモノ（商品）へと変化する。モノの豊かさは、ある意味で親子の生活を便利にするとと言える。一方、それらは自らの子育ての必要感から作りだされたモノではない。現在、他者から提供されるあふれるモノの中で、その使い方さえ教えてもらわなければならないという逆転現象を生んでいる。それがモノにたよる育児へと変化し、もはや商品化されたモノがないと育児が難しい状況である。子どもの成育環境の悪化が叫ばれる昨今、本研究で取り上げた諸事象は、一考すべき問題であろう。

はじめに

近年、子育て用品が多種多様になってきている。その一方で、育児に負担を感じ、子育てに不安を抱えている親が増加傾向にあり、社会が子育てを支援することは、今や常識となっている。さらに家庭における子育ての機能の低下が叫ばれるが、子ども（乳幼児、以下同様）の生育環境は育児用品の多種多様化に反比例するかの様に悪化傾向にある。

この子育てをめぐる閉塞的な状況の打開策を考えるために、日本人はどのように子育てに取り組んでいたのかという歴史を改めて振り返る必要がある。しかし、子どもの生活史に関する研究は文献資料も少なく低調であるばかりか、育児行為や様式、モノ（育児用品など）を中心とした検証はほとんど行われていない。

そこで本稿は、日本の伝統的な子育てにおいて、受け継がれてきた乳幼児を「おんぶ」や「抱っこ」

する姿に注目し、近代化とともに変容する日本人の子育てのありかたを検討する。次に伝統的な子育ての道具であるエジコや子守帯の変容や、ベビーカーの誕生等を振り返ることで、日本における育児用品の歴史的な概要を把握した上で、現状を分析する。

以上の分析を通して日本における子育ての変容の一端を明らかにすることを目的とする。

1. おんぶからだっこへ子育て様式の変容

(1) 子守をする子ども

明治10(1887)年に来日したエドワード・モース^[1]は、「私は世界中に日本ほど赤坊のために尽す国はなく、また日本の赤坊ほどよい赤坊は世界中にない」と日本で乳幼児が大切に扱われていることを繰り返し述べている。特に彼の目に珍しく映ったのが「おんぶ」、つまり子どもを背負う姿であった。「婦人が五人いれば四人まで、子どもが六人いれば五人までが、必ず赤坊を背負っていることは誠に著しく目につく。時としては、背負う者が両手を後ろに廻して赤坊を支え、またある時には赤坊が両足を前につき出して馬に乗るような恰好をしている。」^[2]とその様子を記している。

もともと子育ての際に「おんぶ」をするのは、日本特有の風習ではない。明治6(1873)年オーストラリアで開催されたウィーン万国博覧会の「童子館」には、オーストラリア・イギリス・中国・エジプト・インド・エスキモーなど、各国の子どもの抱き方、背負い方の展示があったが、その中の奥国(オーストラリア)は、明らかに子どもを背負っている図が残っている^[3](図1参照)。



図1 第5図奥国

(『明治保育文献集』1巻所収、日本らいぶらり 1977年より)

しかし、欧米では「おんぶ」よりも、子どもの抱きかたの方に注意が払われていたらしい。「童子館」の展示には、幼児教育とともに、子どもの体の健康に留意する必要があるとして、「抱き方」「手の引き方」「寝かせ方」「机に座る姿勢」の良い例・悪い例が示されたが、「背負い方」は取り上げられていない。日本で子どもを「おんぶ」する姿が、あまりに多いことに、モースは驚いたのだろう(図2参照)。

(2) 庶民の子育て—古くからの風習

もともと日本でも「おんぶ」は、どちらかといえば庶民の子育てであったようだ。例えば、江戸時代、子どもの頃大切に育てられたことをさす諺に、「お乳母日傘にてそだちたる者」がある。これは、昔は乳母を召し使うほどの身分で、日傘をさしかけられて大切に養育された、つまり上層の出身であることを自慢する語であった。文化10(1813)年『骨董集』には、日傘をさしかけられ、乳母の懐手で大切に抱かれている図がある(図3参照)。



図2 第1図抱き方

(『明治保育文献集』1巻所収、日本らいぶらり 1977年より)



図3 「お乳母日傘にてそだちたる者」(『骨董集』、日本らいぶらり 1813年より)

また幕末の『守貞謾稿』（巻十八）には、「小兒ヲ負フ者、冬月ハ、半身ノ搔卷ヲ用フ者下図ノ如クス」と、「ネンネコ半天」を江戸の庶民が冬に着て、子どもを背負う姿が絵入りで紹介されている。そしてその名の由来は、嬰兒赤子は「ネンネ」というからだ、と推測している。



図4 『合本自筆影印守貞漫稿』（東京堂出版，1989年より）

子どもを着物にくるみ「おんぶ」することは、日本では古くからおこなわれていたらしく、すでに平安末期の『信貴山縁起絵巻』には、素肌に裸の子どもを背負っている女の姿が描かれている。また『一遍聖絵』，鎌倉時代の『長谷雄卿草紙』『春日権現験記絵』，室町初期『福富草紙』など、中世から子どもをおんぶしている画像が数多く確認される¹⁴⁾。ただし黒田日出男が指摘するように、ここには「おんぶ」をしている人に子どもの姿はみられない。中世と江戸の大きな違いは、「おんぶ」，つまり子守が子どもの役割となっている点だ¹⁵⁾（図5，図6参照）。



図5 『信貴山縁起絵巻』（『絵巻物による日本常民生活絵引』全五巻，平凡社，1984年より）



図6 『長谷雄卿草紙』（『絵巻物による日本常民生活絵引』全五巻，平凡社，1984年より）

（3）「おんぶ」をする子ども

モース『百年前の日本』（小学館，1983年）には、女兒の子守の写真が多く残されている。欧米人には、子守が子どもであることが驚きであり、さらに、幼い子どもが子守をする姿は、時として痛々しく彼らの目に写った。モースの翌年来日したイザベラ・バード¹⁶⁾は、「六歳か七歳の小さい子どもが軟い赤ん坊を背中に引きずっている姿を見るのは、いつも私にはつらい。赤ん坊の頭は丸

坊主で、日光を浴びて髪が縮れて見える。ぐらぐらして今にも落ちこちそうである。」^[7]と語る。

子どもが這い這いをはじめ、イズミ（エジコ）などに入れにくくなると、子守をつけたのだろう。モースは、老人と子ども総出で田植えをする脇で、「小さい子供達は赤坊を背中に負って見物」している^[8]と記している。農繁期、戸外の田畑で働く時、子どもを背負ったままでは、母親は激しい労働ができない。おそらく幕藩体制が落ち着き、各種の産業が発達する、江戸時代中期以降になり、農村で幼い子どもを子守にやとうことが、盛んになったのではないか^[9]。小さな腕では長時間、子どもを抱っこすることはできない。子守りにとって「おんぶ」は、どうしても必要なことだったのである。

明治9（1876）年文部大書記官九鬼隆一^[10]は、文部大輔田中不二麿^[11]へ提出した「巡視」報告書の中で、「中等以下ノ人民」の子弟の現状を、父や母が働きに出ると、6、7歳の子どもは家の手伝いをするばかりではなく、幼い弟妹を背負い草刈りなどを行っている、と述べている^[12]。また明治17（1884）年渡邊嘉重^[13]が『子守教育法』を著し、子守のために通学できない子どもや、また、通っても「おんぶ」している乳幼児がいるために勉強に専念できない子どもたちに教育の場を保障するために「子守学校」を提唱したことからもわかるように、学齢期の子どもが子守をさせられたことも多かったようだ。

『日本産育習俗集成』（第一法規出版、1975年）には、「子供の腋に帯をかけ、肩にかけて負うことをタスキガレーといい、その上からかける半天をネンネコという。…幼児を負うには半年くらいは足をはだけずにそろえて負う（長崎県対馬付近）」とあり、その年齢は、「子守は十二、三歳から十六歳ころまでで、村中から頼み、子守には仕着せといって、盆正月に新しい着物をこしらえて与える。子守は頭を手拭いで縛り、子を負って、半天を着る（長野県西筑摩郡大桑村）」とある。明治20年（1887）『女学雑誌』第57号「子守女の論」も「子守とハ大略一、一二歳以上一五、六歳以下の小女にして人に雇われて子供を看護を託さるるものなり」と述べるなど、12歳前後の子どもが子守に雇われ、子育ての役を担っていたことは多くの資料から確認できる。もっとも子守奉公にでる以前の幼い子どもが、家の手伝いで弟妹の子守をしていたことはいうまでもない。

（４）近代的育児指導と「おんぶ」

モースやバードは、「おんぶ」する子どもの幼さに驚きながらも「赤坊の叫び声は、日本では極めて稀な物音である」^[14]、「私は今まで赤ん坊の泣くのを聞いたことがなく、子どもがうるさかったり、言うことをきかなかったりするのを見たことがない。」^[15]と、日本で乳幼児が大切に育てられていることに感激している。彼らはけっして「おんぶ」という育児法そのものを否定的にみているわけではない。だが、日本の近代的育児思想は、欧米に対する劣等感から、「おんぶ」を遅れたものと受け取っていたようだ。

近代的な育児指導のなかで、「おんぶはやむをえないときだけにせよというのがゆるやかなほうで、多くはやめたほうが良いとか、厳禁せよといった指導をしてきた」のである。その理由は、「鳩胸になるとか『せむし』になる、O脚になる」から、「呼吸が不規則になる、血液循環を妨げる、熱射病になる」といったものが挙げられている^[16]。

例えば、明治20年永井久一郎演述「論説東京婦人教育談話会」では「外へ出るに附て日本ではおぶって出ますがおぶって出る事ハ大変わるい事であります。…日本人の鳩胸や「背ムシ」になるのは子供の時分からおぶっておるからであるといわれました、或は左様かも知れませんが、西洋では決して子供をおぶってあるきません、抱て出る事はありますがそれも抱き様があります、故に日本でもおぶうのはやめるがよろしい」（『女学雑誌』第69号）、と述べられている。

だが子守りだけでなく、母親も子どもを背負えば両手が空いて家事をすることができるので、「おんぶ」はなかなかなくならなかった。それでも子守りや働く母親がするおんぶは、長時間で、しかもおぶい紐を強く締めたものになりがちであり、それが乳児の健康や衛生によいとはいえなかった。そこでおんぶはやめよといいながら、「正しいおんぶの仕方を」を指導せざるをえなかった^[17]のである。

明治30年代の終わりに、龍野婦人会（現：兵庫県たつの市）が、子守のために、開設した学校の教育内容を公開した『子守読本』（山本文友堂、明治40年）には、子どものおんぶの仕方の注意もある。

第三 子守のつとめ（その一）

一、児を負ふ時の心得

すべて生後百日位迄は外出させぬかよろしい。殊に冬は朝、夕方は百日以上の児でも出さぬ方がよろしい。さて児を負ふときは、結付帯は、巾の広い柔かなのがよろしい。

結付帯は、児の臀部でひろげ脇の下などをかたくしめてはなりません。

負ふときに、股をひろく引きわけてはなりません。

我が頭髪のみだれぬよ一気をつけ、かつ頭に針などさしてはならぬ。

児を負ふて走つたり、飛んだり、腰をかがめるのはよくない。又泣くからといってむやみに振りうごかしてはなりません。

(5) 衛生の思想と「おんぶ」の指導

近代の子育てを考える上で、近代（科学）的な「育児法」と「衛生」の啓蒙は大きな課題であった。1851年に伝染病の流行の国際的な対処のためにパリで開催された衛生会議は世界に広まり、日本では明治20年に衛生をテーマとした単独の展覧会「衛生参考品展覧会」が開催される。そして日本各地を巡回し、大正期には頻繁に衛生思想啓蒙のために催された^[18]。「衛生」という考え方も、実は近代の産物なのである。

大切に育てられているとはいえ、現代人の目からみると首をかじげたくなる育児や衛生に関する感覚や迷信が、前近代にはいくらかあった。例えば、乳幼児を雨に濡れたまま平気で「おんぶ」している姿に、モースは驚きをかくせない。

雨が絶間なくビショビショ降り、おまけに寒かったが、これ等裸体の男共は、気にかける様子さえも示さなかった。日本人が雨に無関心なのは、不思議な位である。小さな赤坊を背中に負った子供達が、びしょ濡れになった儘、薄明の中に立っていたりする^[19]。

そして日本では「衛生博覧会」などで、これまでの古い育児観の担い手である老人や乳母、子守などが衛生の敵、不衛生なものとして警戒されたのだ。

大正9(1920)年東京教育博物館で開催された「児童衛生展覧会」には、陳列品種別の「六養護 小児と子守」の項目があり、子どもの抱き方・背負い方の善悪を示した人形が展示された。当時、東

京女高師（現お茶の水女子大）保母であった星野楽子は、次のように伝えている^[20]。

二部の養護の部では「美しい人形で子供の負ひ方抱き方の善悪」を示し、「町家風の内儀が赤坊の首を胸に押しつけて固く抱いて居る」のにくらべ、「束髪のお様が左手は軽く頭部のうしろを支へ右手は一寸背中に入れて赤児を平らに抱いて」いるのを並べている。

後ろのガラス箱には、「老婆がねんねこの中に赤児のくびを埋め、女中が背中に頭をおしつけて」おんぶしているのが悪い例である。これに対して、「中央の若い母が前から赤児の顔が明らかに見得る様嬰兒の体」をややななめにおんぶしているのを良いとしている。

また同展の正面階段には児童の要求として18点のスローガンが掲げられており、そのなかには「子守学校の普及を計れ」「子守任せをやめよ」などがあった、という^[21]。ここでは誰がその善悪を担っているのかが、視覚化されている。「町家風の内儀」「老婆」「女中」が悪い見本で、近代的な教養を身につけたと想定される「束髪のお様」「若い母親」が良い例の見本だ^[22]。

(6) 「おんぶ」から「抱っこ」へ

かつて『守貞謾稿』が紹介した「ネンネコ半天」は、「おんぶと共に廃れた育児服」であった、と『朝日新聞』（平成23[2011]年9月24日付）「サザエさんをさがして」はいう。確かに子どもを抱いたまま着られるコートはあっても、おぶい紐や子どもをネンネコで羽織りおぶっている親の姿はあまりみかけない。

同紙によれば、昭和26年(1951)掲載のタラをおぶったサザエさんの姿からもわかるように、戦前から1960年代まで、『朝日新聞』紙上には、様々なネンネコ姿の写真やマンガが掲載されている。50年代後半から60年代前半には、スカートやズボンなど洋装にもそれを合わせた。下に何を着ていてもネンネコを羽織ればごまかせるので、近所にてかけるにも便利だからだ。しかし、高度経済成長期に入る60年代以降にネンネコは廃る、という服飾評論家市田ひろみの見解を紹介する。

養育者に「抱っこ」され、育てられることは、育児にのみ専念できる環境が必要となる。江戸時代や明治期、それを享受できるのは一部の余裕のある階層であった。欧米の情報や文化が庶民レベルまで浸透し、普及しはじめる60年代に入り、

そのような環境が一般大衆にまで広まったのである。「おんぶ」をしなければ必要のないネンネコの衰退は、それと軌を一にする。それはまた日本人の子育ての様式の変化を映し出しているのだ。

これまでに見てきたように「おんぶ」は、庶民の必要性から生れた育児法であり、その起源は平安時代にまでさかのぼる。しかし、必ずしも科学的な根拠があるわけではないが、「近代的育児指導」が「おんぶはやめるがよろしい」としている点から、大人の日常とは異なるものとして、子どもの生活を考えるようになったということができよう。

明治以降わずか150年ほどの間に「おんぶ」から「抱っこ」へ、日本人の子育ての様式が変化をとげていく。

2. 育児用品にみる子育ての変化

(1) エジコ

日本古来の産育道具のひとつにエジコ（嬰兒籠）と呼ばれる道具がある。藁、あるいは木、竹を用いてやや浅い筒型に編み上げ、子どもを入れておく器状の道具のことであるが、時代や地方によってはエジコという名称のほか、イズミ、イズメ、イツコ、ツグラ、ツブラ、クルミ、フゴなどとさまざまな名称で呼ばれている^[23]。昭和32年（1957）に祖父江・須江・村上らによって行われたエジコに関する調査では、エジコの使用分布は、広島、島根、鳥取を西限として、日本の東北部一帯に広く分布しており、関東地方では、茨城、栃木、群馬の各県のそれぞれ南端部を結ぶ線を南限としている^[24]。この調査によれば、かならずしもエジコは日本全国で等しく使用されていた道具とはいえず、主に農耕・林業・漁業を生業としている人々に使用される傾向が強い道具であるということがうかがえる。

しかし、高度経済成長期以前の日本では約70%が第一次産業に従事していたという実態を鑑みれば、日本におけるエジコの使用頻度は決して低くなかったと考えるのである。かつて、柳田國男は「ツグラ児のこころ」^[25]において、「日本人の生い立ちには、三通りの差別がある」とし、「抱き児かかえ児」、「背なか児」、「ツグラ児」を示して、これらの状態にある「赤ん坊」がどのように親や成人と接しながら言葉を覚えていくのかを論じたことがある。そのプロセスはともかく、この柳田の記述から、乳幼児をツグラ（エジコ）に入れると

いう行為は地域によって差はあるものの、抱っこやおんぶとならんで日本の伝統的な子守りの方法であったと捉えることができよう。

しかし、現在では、こうしたエジコを用いた育児・子守は必ずしも広く行われていることではなく、エジコという道具自体も盛んに流通・販売されるものではなくなった。おおむねエジコは第二次世界大戦後使用されなくなった地域が多く、東北・北陸・中部地方の一部で1950年代ころまで使用されたという指摘もあるが^[26]、エジコが使われなくなる背景には、どのような子育ての変化があったのであろうか。ここでは、エジコに関する先行研究を概観しながら、エジコという育児用品を通して子育ての変化を明らかにしたい。

なお、子どもを入れる藁などで作製された器状の産育道具には、さまざまな呼称が存在しているということを承知しているが、本論においてその呼称を使い分けることは却って煩雑になるため、基本的には「エジコ」と総称することにする。

① エジコの機能と使用方法

エジコのことを「イズミ」や「エジメ」と呼ぶ地域がある。一説によれば、「イズミ」とは飯詰（いづめ）のことであり、蓋をつけて冬期に飯の保温用にも使うことから出た呼称であるとも説明されている^[27]。また、愛知県渥美・北設楽両郡では、飯櫃入れの籠を「イジコ」、「ビク」、「エジメ」などと呼ぶ地域があるといい、静岡県や長野県下伊那郡神原地方では藁や檜皮製の俵や袋を「イジコ」や「イジッコ」、仙台地方では小児を入れる籠のことを「イジコ」と呼ぶと記載されている^[28]。これらの説明から、おおむね藁で作製される器状のこの道具は、その大きさの変化や蓋や取っ手をつけるなどのアレンジによって袋として使用したり、飯詰（飯櫃入れ）として使用したり、子どもを入れて子守に使用したりすることができるという汎用性の高い生活道具であったといえよう。つまり、現在、我々がエジコと総称している子どもをいれておく藁製の道具も、当初から子どもをいれておくための独立した機能をもつ子守道具として作製・使用されていたとは限らず、飯詰（飯櫃入れ）との兼用、あるいは転用という使用方法も否めないのである。大藤ゆきが「大小いろいろ作って冬期には飯の保温用にも使う」^[29]と述べているのは、こうした背景があるのであろう。

その一方で、当初から子どもを入れる道具とし

て自作，あるいは購入することがある。青森県岩木川流域の事例では、「自分の家でわらで作ったり，買ったりした。昭和 20 年代（1945～）後半には，桶屋に頼んで木のインツコを作った（五幾形），「わら製もあるが前から家にあった木のインツコをつかった。木のインツコを使う方が多い（西目屋村）」という^[30]。弘前市の石場家住宅には未使用のエジコを所有し，展示している。石場家は津軽藩政時代から藁製品を中心に取り扱ってきた商家であるといい，石場家の関係者によれば，農家が農閑期に作っていた藁靴やエジコなどの藁製品を仕入れて，昭和 20～30 年くらいまで販売していたこともあったと伝えている^[31]。おおむね，藁製のエジコは自作することもあったようであるが，木製のエジコは桶屋や大工に依頼して買うこともあったようである。また，戦後くらいから藁で編める人が少なくなり，購入，あるいは竹の籠や木の箱でその用途を果そうとしたことがうかがえる^[32]。

一方，同じ青森県では下北半島地域では「藁がないので，エツコは使わず，竹や行李に小さい布団を敷いて入れた（川内町畑）」、「船で青森から買ってきた（川内町宿野部・蛎崎）」という事例がある^[33]。

こうしたエジコの使用方法は一様ではないが，秋田県南部の事例では，子どもをエジコブトンにくるんでエジコのなかに入れて縛っておくといひ，内部の底には藁灰を 3～4 cm の厚さに敷き，その上に藁しべを 7～8 cm の厚さに敷く。灰と藁しべの間には「ビニール布」を敷く場合がある。「乳児は尻部の衣類をすべてとり去り，尻部がぢかにこの藁に触れるようにし」，「大小便はすべて直接に排出され，藁と灰に吸収されるようになっている」^[34]という。この使用方法について，調査者である祖父江らは「母親を含めて家内中が農耕（或は林業，漁業）作業にでたあと育児の役に当る人が誰もいなくなるため」，「乳児を縛って動けなくした儘このエジコの中へ入れて朝から夕刻まで放置しておくものであり，昼間の授乳は朝，昼食時，夕刻に限られている」と説明している。また，秋田県男鹿脇本の木製の「エズメ」は，一番底に粃殻，その上に藁しべ，むしろ，木炭，もぐ（藻）などを敷く。「エジミマキという襟のついた薄い蒲団を二枚作ってこれで乳児を巻く。もぐは，一日に三回，灰やむしろ一回くらい取り替える」というものである^[35]。長野県更級郡稲荷山町の事例では，「わらで丸く大きくざるのような形に作り，中にスベ

（わら）を敷き，その上に一尺くらいのそばぬかの布団を入れ，その上に小児を，おむつのまま，着物をまくり，布団で風の入らないように包んでいれておく」という^[36]。

おむつをつける場合と，つけずにそのまま入れておく場合の事例があるが，これは地域差によるものなのか時代によるものなのかは不明である。しかし，仮に日中に 3 回くらいしかエジコに入れられた乳児のもとへ母親が帰ってこないのであれば，むしろおむつをつけない方が衛生的であるのかも知れない。例えば，北海道郡上ノ国村では，「わら製の円い桶型のものに嬰兒を入れ，昼は数回哺乳し，午食には用便をしらべ，夜になって初めて母が抱く」という^[37]。宮城県宮崎町でのエジコの使用時間の調査（1957 年 8 月）では，「母親が野良に出る午前 7 時乃至 8 時から野良から帰る午後 5 時乃至 6 時まで使用する」，「午前 10 時頃，昼食時に母親が家に帰って来るときは子供はエジコから出されることもある」といひ，エジコを使用する場合には，母親と乳児が接する回数や時間が限られていたようである。こうした事例から，エジコを用いた子守は，抱っこやおんぶにならぶ子守方法であるが，この場合，主として保護すべき人が常時そばにいないことを想定した子守方法であったということができよう。一方，「布団と一緒にタナ（負ぶい紐）で縛って，田のあぜにも連れて行って作業した」などというように，エジコに乳児を入れて農作業の現場に連れて行く事例もある^[38]。

このようにエジコは東北を一帯とした地域では，家人のいない家や親の作業中における乳児の安全で暖かい置き場所として盛んに使用されるとともに，保温性に優れていたことから，就寝時にも使用することもあった。

② エジコの使用背景

子どもは出生後，どれくらいの間エジコに入れられるのであろうか。エジコに入れ始める日については，「三日祝」（信州諏訪地方）や「七日の湯をつかってから」（飛騨白川村），あるいは，「六日目の名付けの日」（トカラ列島 中ノ島）などと儀礼的な意味合いをもたせている事例がある^[39]。しかし必ずしもそうした慣習にとらわれない場合もあるようで，青森県の事例では，「一週間もすれば，藁のエンツコに入れて 1 歳から 3 歳になるまで育てた」^[40]，「どこの家でもわらで編んだエンツコ（イ

ンツコ・イッコ)に、子供を2~3歳くらいになるまで入れた」「3~4歳になるまで長くインツコに入れていた人もあり、子供が歩き出すのは遅かった」^[41]、「昭和30年代(1955~)では、ほとんどの家でエンツコを使い、産まれればすぐに入れた」^[42]、「当時は仕事が忙しくて、赤ん坊が歩くようになる2歳くらいまで入れておいた」^[43]というように、エジコに入れ始める時期や入れておく子どもの年齢の様ではない。しかし、これらの事例に共通しているのは、子どもが歩き始めてからもエジコを使用し、その子どもがエジコからはい出てこないように小さい布団でくるんだあと、肩に帯や紐などをかけて固定したという点である。こうした事例の背景には、子どもが生まれてもつきっきりで世話をすることができない当時の村落の労働環境がうかがえる。子どもを産んだばかりの嫁だとしても貴重な労働力の一員であったらうし、「若い夫婦は田畑の仕事が第一であり、育児をする時間がなかった」^[44]という実態は、子どもが授乳期を経て歩き出してもなお、固定できる安全で暖かいエジコを必要とする背景が十分に理解できるのである。

また、日本には生まれてすぐの小さい子どもに対して「子守りをつける」という慣習もある。これまでの「子守唄」の調査や子守の年令、選び方などの調査報告の多さをみても、その定着度がうかがえよう^[45]。では、「子守りをつける」という慣習とエジコの使用はどのように関係しているのだろうか。例えば、大藤ゆきは「赤ん坊がはいはいをはじめ、ツグラにいれておかれぬようになると子守をつける。モリをつける間は、子どもがひとり歩きができる四、五歳ごろまでが多い。」としている^[46]。また、「寝かせておくだけでは手に負えなくなると子守りをつける」、「都会では給金を出して雇うが、農村では祖父母・兄姉、または親戚の年ごろの子」がその役目を果たしていたとい^[47]、やはり、エジコに入れられなくなったくらいの成長の段階で子守りをつけたようである。

しかし、時代の流れとともにエジコは次第に使用されなくなっていく。昭和32年(1957)に祖父江らによって行われたアンケート調査では、エジコの使用は「終戦後に減少」という回答が一番多かった。このエジコの減少の背景として、彼らは以下4つの要因があると指摘している^[48]。

a) 戦後、農耕作業が機械化され、人手が不足しなくなったこと

- b) エジコが小児の保健上に悪影響を与え、特にクル病の原因となったということが小児科医の間で論議されるようになり、保健所によるエジコ撲滅運動が活発となったこと
- c) 終戦後、育児という事実について人々が強い関心を持つようになり、小児を従来のように放棄しておいてはいけない、もっといたわるべきだと考えるようになったこと
- d) 産制の普及による小児数の減少

a)は特に戦後の高度経済成長期とも相まって農作業の機械化が進んだことに起因していると考えられ、これまで労働力とされてきた女性や高齢者の関わりが軽減されたのであろう。そのぶん、女性や祖父母が子守りや育児に時間を費やすことが可能になったということがうかがえる。b)とc)の要因は連動しているのであろう。エジコ使用の弊害としては、「歩き始めが遅くなる」、「クル病の発症」、「後頭部の変形」、「親不在時の事故(猫・犬・鼠による食い付きや窒息)」、「パーソナリティ形成上の問題(フラストレーションによる攻撃性、泣いても誰もいないという不安感)」などが小児科医などの専門家たちによって指摘されている^[49]。実際に宮城県では、昭和23年(1948)以降、宮城県衛生部と東北大学医学部小児科による「母子衛生指導模範地区」を設け、乳幼児の検診とともに、母子衛生やクル病の早期治療などの指導が行われてきた。そこでは、エジコを使用することにより乳児の運動が制限され、日当たりの悪い部屋に放置することは子どもの発育に悪影響をおよぼすという理由からエジコ使用を廃止する指導が行われたという^[50]。さらにこれと同時期に行われた生活改善運動もエジコの使用に影響を与えている可能性もあろう。生活改善運動とは、昭和23年(1948)に施行された農業改良助長法に基づく生活改良普及事業である。生活改良普及員を通じて、衣食住や家計の改善、嫁の地位向上、子どもの発育向上などの改善がはかられた。この活動の影響は一様ではなかったようであるが、農村の生活や生活における価値観などに少なからぬ変化をもたらしており、子どもの子守りや子育て観も例外ではなからう。

③ 資料としての「エジコ」

以上に述べたように、ある一定の時期までは盛んに使用されていたエジコであるが、家庭におい

て使用されなくなった後はどのようにされていたのであろうか。エジコは、ひとつ作ると20~30年は保つといわれ^[51]、その家の兄弟たちで順繰りに使用した。さらに地域での貸し借りも行われていたようで、「エジコは借りても催促されるまで返してはいけない(山形・長野)」という慣習が伝えられる地域もあれば、その逆に「エジコは絶対貸してはいけない。(新潟)」と伝える地域もあった^[52]。筆者(加藤)の調査では、子どもが成長して使わなくなった場合には、「特別な処理の方法はなく、何となく物入れとして使っているうちに痛んだので捨てた」ということであった^[53]。

その一方で、エジコを地域資料あるいは民俗資料として捉えて、地域博物館などで所蔵している場合がある。筆者(加藤)の調査では、やはり東京都内、および京都、大阪などの都市の博物館でエジコを所蔵していなかった^[54]。そのみならず、「おんぶ紐」やベビーカーなどのいわゆる子守り道具の残存率も大変低かった。

それらの育児用品は消耗品として位置づけられ、家庭内で処分してしまうことが多く、家庭内で使用された育児用品を博物館資料として寄贈するという行動には至らなかったようだ。そういう意味では都市部に限らず、現代の博物館において資料としての育児用品の収集・保存が十分になされているとは言い難い現状であった。

本論の調査では、青森県立郷土館において数点のエジコ(この地域ではエンツコと呼ばれている)を閲覧することができた^[55]。これらはおおむね昭和30年頃まで使用され、昭和40年代に津軽地域から収集したものであるということである^[56]。以下、その概要を示す。

いずれも子どもをいれておいても倒れないように底部に厚みがあり重い(エンツコ①,②,③,④)。さらに、底部より縁や取手の方が破損しやすいようで修復痕がみられるものが多かった。青森県立郷土館で所蔵しているエジコは、おおむね農村地帯で使用されたもので、町場では使われていない。しかし、時代が新しくなると、自作するより購入する方が増えてきたといい、なかには朱塗りのエジコもあったという。朱塗りのエジコの具体的な使用法は不明であるが、朱塗りという形態から子どもの誕生の祝いとしての記念、あるいは贈答品としての要素がうかがえる。



エンツコ① (木製・常設展示中)

経 58 cm ・ 高 39.5 cm ・ 低 25.5 cm

昭和初期に使用。桶状。大工に依頼して作ってもらった。



エンツコ② (藁製・常設展示中)

外経 57×65 cm ・ 底経 45 cm ・ 高 35 cm ・ 深 28 cm ・ 縁厚 10 cm



エンツコ③ (藁製・体験コーナー展示)

外経 75×70 cm (内径 60 cm) ・ 底経 50 cm ・ 高 35 cm ・ 深 26 cm



エンツコ④ (藁製・収蔵庫)

外経 63 cm (内径 53 cm) ・ 底経 45 cm ・ 高 31 cm ・ 深 27 cm

このように生活に使用された道具が資料として地域博物館に寄贈されるケースは、可能性としては低く、生活で使用されていた道具がすべて資料として保管されるとはいえない。特に家庭におい

て消耗品と見なされる道具については、その収集の可能性も低くなる。エジコの場合もかつては消耗品として扱われ、東北の農村では特に珍しい道具ではなかったのであろう。もちろん数点は資料として収集するが、さまざまな種類や年代に分けて定期的に収集するという性質の資料ではなかったことも理解できる。しかし、その道具の変遷に注目してみると、使用するうちにどこが破損しやすく、どのような修復をしながら使っていたのか、さらに材質の変化にはどのような背景があったのかを明らかにすることは、エジコを通して子育て観の変化を明らかにする有効な手段と考えるのである。

エジコは東北の農村地域で盛んに使用され、この背景には生まれたばかりの子どもを傍にはいられない、あるいは子どもを背負ったままではできない作業をしなくてはならない農村の母親の実態がうかがえる。このような環境においてのエジコは、農作業で誰もいなくなった家のなかに、子どもを固定しておくことが可能であるという利点があり、エジコではなく行李や箱が代用されることもあったほど、育児においては必要不可欠な道具であったのであろう。恐らくエジコを使用してきた人々は医学的知識の有無にかかわらず、歩き始めが遅くなることや後頭部の変形、保護者不在時の事故の可能性は、日常の育児の経験から認識していたはずである。しかし、彼らはそれらを承知しながらエジコを使用し続けなければならない環境にあったであろうし、かつては子どもにとって良いか悪いかということが判断基準ではなく、エジコとは「そういうもの」として認識されていたのではなかろうか。だからといって、必ずしもエジコを使用していた地域が子どもの成長や育児に無関心だったわけではなかろう。実際にエジコに関する俗信では、子どもの健やかな成長を願うものも確認されている¹⁵⁷⁾。

戦後間もなくして政府主導の啓発活動が盛んになり、高度経済成長期を迎えて人々の生活は安定し、豊かになってくる。そのような社会の変化が家庭における育児や子どもの人格形成へ興味・認識に影響を与えたことも事実であろう。さらに託児所や保育所が設置、少子化、ベビー用品の充実などの要因が重なっていくことにより、エジコを使用した育児は減少していったと考えられるのである。

しかし、ある地域においては、エジコの減少と

子育ての変化は現段階では大きく関係しているとは言いきれない。経済的に豊かで、科学的、合理的な発想に基づいて子どもを主体とした子育てが行われている現代社会においてもエジコは製造されており、子育てに利用されているのである。ただし、現在は誰もいない家に子どもを置いておくためではなく、ベビーベッドやクーハン、バウンサーなどと同類の、あくまでも子どもにとって快適な一時的な居場所として使用されているというように、エジコの使用目的が変化してきているといえる。エジコの場合、道具そのものから子育て観の変化を捉えるのではなく、その使い方の変化に注目することでより具体的な子育て観の変化を捉えることができると考える。

(2) ベビーカー

子どもがいることは、家庭での生活と仕事の両立に様々な課題が生じることは、昔も今も同じである。とくに、1歳前後の子どもがいる家庭では、その子を育てるという側面からは移動の自由を保障してあげたいという気持ちと、その子の安全を保障するためにそばに大人がいなければならないという（貴重な仕事手が奪われてしまう）大人側の実情の狭間の中で、子どもを育てることをしてきた。この矛盾した事情が両立できるように、古くからわが国では様々な方法を工夫し対応してきたといえるだろう。

その中でもハイハイや一人歩きを始めた子どもの安全確保という視点から乳母車に焦点を当てて資料を収集し、その使用の経緯について整理を行う。

① わが国における乳母車の使用のはじまり

現在ではほとんどの家庭で使用されている乳母車（ベビーカー）が、わが国では、いつごろから使用されるようになったのかについての文献は極めて少ない。ほとんど唯一といってもよい研究が、加藤翠¹⁵⁸⁾の研究である。

それによれば、乳母車とおぼしき乗り物に関するもっとも古い記述は、明治7年に発行された翻訳書である「子供育草」¹⁵⁹⁾に見られるという。この書物の原著本は、アメリカの医師ゲッセルにより著わされており、その中で当時すでにアメリカ国内で使用されていた乳母車のことが書かれている。

その他に乳母車が書かれている書物も、やはり

訳書である「小児養育談」^[60]である。原本はイギリスの婦人の育児書であり、夫が子ども用の車を買って求めて、子どもをその車に乗せて野外に連れ出したことが書かれている。また14世紀の末に日本を訪れたルイス・フロイスは、日欧の文化を比較して、欧米では幼児を眠らせるために揺り籠を用い、歩くことを教えるのに小さな車（注：歩行器のこと）を使うが、日本人はこうしたものは何も使わないと書いている^[61]。このことから、欧米から乳母車が輸入されるまでは、わが国においてはこうした類の車は使われていなかったといえるだろう。

明治期の初めに欧米では乳母車が使用されていることが、翻訳書を通して紹介されるまでは、わが国においては乳母車の使用はなされていなかったと考えられる。

② 欧米における乳母車の歴史

そもそも乳母車という乗り物は、どのような目的で使われることになったのであろうか。その点について考察してみると、2つの要因が考えられる。

その第1は、フィリップ・アリエスが明らかにしているように、18世紀以降にみられた「子どもの発見の時代」の影響である。それ以前の「多産多死」という子育ての現実により生じた子どもへの冷たいまなざしから、教育的な子育ての必要性から生じた「少なく生んで大事に育てる」ことへの温かなまなざしへの変化が、子ども用の多様な玩具や遊具の開発という現象を生み出し、乳母車の開発もその影響を受けていたと考えられる。

World Lingo^[62]を検索した結果によれば、1733年にイギリスの建築家ケントは、公爵の子どもを楽しませるために、子どもが座って乗れるバスケットを付けた乗り物を作り、仔馬などに引っ張らせたという。これがヒントになり、他の王室も子どもを載せることのできるキャリッジを作成し、高価な装飾品を付けた子ども用の乗り物が上流階級に流行ったという。この説明では現在乳母車との関連性についてはふれていないが、子ども用の高級な乗り物の必要性を認識した最初の出来事として、意味づけられると思われる。

その要因の第2は、産業革命によってもたらされた馬車から鉄道へと変動していく交通手段の変化と、それに伴う路線の拡大である。まず欧米において鉄道が敷かれる以前の馬車で移動していた

時代には、子どもを抱えた女性が馬車で移動することは基本的には無理だったと思える。何よりも子育て中の婦人は家庭で過ごすことがほとんどであった。もし馬車で外出するときには、メイドのような子どもを世話する人に託していたであろうと思われる。やがて鉄道が敷かれ、子どもを抱えていても静かで安全に移動ができるようになってからは、駅を降りてから子どもを載せて移動する車が必要になってきたのではないだろうか。それはまた、家庭にいたとしても子どもを連れて近所に買い物や散歩に出かけるという近代的な家庭生活像が成立するようになっていく過程とも連動していると考えられる。

欧米における乳母車の起源については「1848年にニューヨークのチャールズ・バートンがつくったのが最初とみられ、当時は歩道で歩行者に突きあたるといので評判が悪かった。バートンはのちイギリスに移って工場をつくり、ビクトリア女王やスペインのイザベル女王などから注文をうけ、（その後）一般にもひろまった」とある^[63]。

乳母車は、当時の王室などで、子どもに贅沢な器具や遊具を与える風習が広がっており、その中の子育て用品として乳母車も求められたということであり、仕事と子育ての両立というよりも、揺り籠や歩行器と同じ類の贅沢な子育て用品としての位置づけであったことが理解できる。

③ わが国における乳母車の導入について

以上のことから、乳母車は遅くとも1800年代の中頃までには欧米で盛んに造られるようになり、それが明治時代以降にはわが国にも輸入されるようになったと考えられる。では、わが国に乳母車が輸入されるようになったのは、いつ頃なのであろうか。

明治31年に発行された「育児の栞」^[64]に、藤製の三輪の乳母車を押す上流階級の婦人が描かれている。また、明治41年発行の「育児の務」には、冬に子どもを籠車に乗せるときの注意が書かれている^[65]。また、明治42年に三越呉服店で児童博覧会が開催されたが、その中に乳母車その他乗物という項目があり、乳母車、保育車、安全子育て器などが列挙されている^[66]。

筆者（柴崎）が2010（H.22.9）年に調査した長野県須坂市にある田中総本家の玩具や育児用品などの中にも、藤製の四輪の乳母車が展示されていた。さらにそれらを購入する方法として明治40年

から三越呉服店が行っていた「三越タイムス」という通信冊子による販売で購入したことが記されていた。東京からはるかに離れた信州の大富豪の家庭では、こうした方法で乳母車を購入し、子どもたちの育児用品として使用していたことがわかった。そこには西欧式の近代的育児法を真似る意図はあっても、仕事と子育ての両立という意図は見られない。

これらのことから、それはわが国においても、乳母車は仕事と育児の両立のために使用されたのではなく、可愛いわが子や孫のために購入した西欧流の社会的ステイタスとしての近代的育児用品とでもいふべき位置付けであったことがわかる。

(3) 子守り帯と子守服

子守り帯とは、乳幼児を背中で負ぶう際、もしくは身体の前で抱く際の補助用具である。特に定義等はなく、おんぶ紐、子守り帯、スリング、ベビーキャリアなど様々な名称で現在にいたるまで流通している。ここでは子守り帯という名称で統一していく。

① 子守り帯（おんぶ紐）—昭和20年から40年ごろ

子守りをするための帯は子守り服と同様、生活必需品としての兵児帯などを用いて子どもを背中に括り付けるなどしていることから、一本の紐状の生活用品が子守り帯の原型であり、第二次世界大戦後直後まで、この型を標準形としている。時に、兵児帯や着物を裁ち直して作成されることもあった。

兵児帯を使用して子どもを背負う姿は、戦後生まれの調査にかかわった我々もこの標準形はかつて目にしたり、使用していた経験がある。しかし、実際に現在その姿を見ようとさまざまな生活資料を保存する博物館・資料館をあたってみてもその資料は見当たらない。そもそも、子育て用品としての位置を持っていなかった大人の日用品を代用している、あるいは再利用されたものであるところから、博物館や資料館に保存すると意識さえ持ち得なかったのだと推測される。

生活に密着し、かつ兵児帯や着物などを再利用し作成された生活用品かつ消耗品であるがゆえの運命であろう。

昭和20～40年当時は、おんぶ紐（おぶい紐、背負い紐、だっこ紐）、ねんねこ半纏は家庭でも製作

されていたことが成書（和裁書）の掲載状況から容易に確認する事ができる（図2, 3, 4参照）。これら成書の記載を見てみると、縫製する上で洗濯に対する配慮や清潔さを保つことへの配慮をするなど子どもの健康面を考えて製作されていたことを伺い知ることが出来る。

② 学校教育における子守服製作

1948 (S.23) 年発行の高等学校教科書「被服 実習編」(文部省検定済 中等学校教科書株式会社)の「9. 乳児のための支度」の項に、“背負い帯”と“背負いぶとん”の縫い方が掲載されており、当時の人々は学校でこれらの縫製方法を学んでいたことが理解出来る（図10参照）。

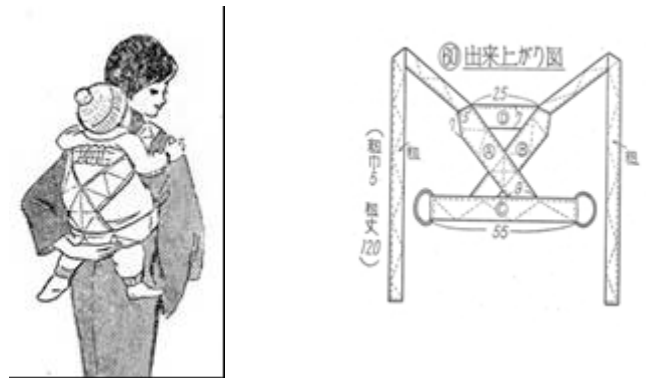


図7 おんぶ紐の展開と完成図



図8 ねんねこぼんてん



図9 図10の出来上がり

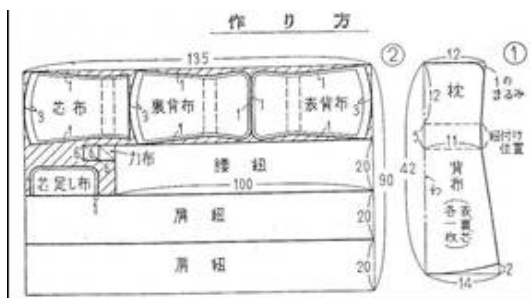


図10 背負い紐の展開図と写真

図7, 10からわかるように, おんぶ紐は一本の帯状ではなく, 子どもの身体を包み込むような配慮がなされている。

ねんねこ半纏や背負い帯(おんぶ紐)は子育てをするうえで欠かせないものとして, 大人の生活用品の中から, おんぶに適したものや保温が可能なものを転用して用いていた時を経て, この時期は転用ではなく, 子育てのためのものとして手作りされていることから, 家庭の生活の中で子育てに関する関心もたれるようになったと考えることができる。さらに, それらは家庭生活の必需品とし学校で教えられていたと考えられる。

しかし, 高度経済成長期を迎え, 経済的にも豊かになり, 女性の社会進出も相まって, ねんねこ半纏や背負い帯(おんぶ紐)は, 次第に家庭内で手づくりされることは少なくなり企業によって生産化されるようになっていった。

また, 生活環境の変化が子育てのための子守服の形態, 用いる材料に大きな変化をもたらした。逆に, 開発される素材をもとにした商品の販売も生活環境に影響し子育て用品にも影響を与えた。

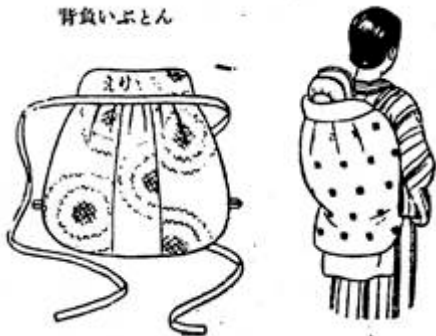
現在では, 家庭内で手作りされた子守服(ねんねこ半纏や背負い帯・おんぶ紐)はほとんど見られなくなっている。

文部省検定済
昭和23年7月20日 高等学校用
被 服
実 習 編 二



中等学校教科書株式会社

背負いぶとん



背負い帯と帽子

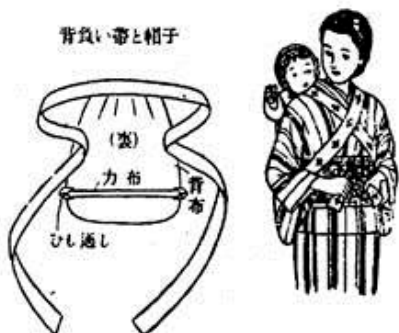


図11 教科書(昭和23)

3. 子育て用品の現状—1960年代から現代—

(1) 子育て用品企業の勃興—戦後~1970年
簡便性+安全性

商品としての子守り帯(おんぶ紐)は, 1953年(S.28)にラッキー工業が子守り帯専門メーカーとして製造・販売を開始した。ラッキー工業の前身は1953年に樋口商店として創立した繊維メーカーである。当時, 商品化されたものは, 別珍素材の一本帯であり, 百貨店の子ども用品売り場や地方の布団店で販売を行っていたという⁶⁷⁾。販売当時の子守り帯には寿と書かれた「のし」が付いている(図12参照)など子どもの誕生を祝って送られたものだという。しかし, おんぶ紐は, カゴを背負って行商をする人々にも愛用されていたという。

第二次世界大戦終戦前と異なるのは, 子どもの育児用品が, 背負うというその機能の類似性から大人の生活必需品として使用されていることである。

1960年頃から「おんぶ紐の使い方が分からない」という消費者の声に応じて, 子どもの枕あて, 足

ぐり付きの紐タイプ（現在のおんぶ紐の基本形、この基本形に忠実なおんぶ紐は保育所の避難用等に現在も使用されている）を開発販売する。ここには、子守り帯（おんぶ紐）の使い方について、帯の形で知らせるという企業主導が見て取れる。



図 12 子守り帯（ラッキー工業販売）

ラッキー工業は、この形態の特許を取得し、1967年にはアメリカへと海外輸出を行った。

他社の状況については、時期を同じくして、1961年には、のちに子守り帯業界に進出するコンビ株式会社が開業されている。コンビはベビー用食器、ラックなどの合成樹脂製品を主力としており、1993年に子守り帯の製造・販売を開始する^[68]。

大阪の鉄パイプ製造を前身とするアップリカ株式会社は1949年にベビーカーを開発、コンビと同様に子守り帯の製造・販売は1995年に参入するまで待たなくてはならない^[69]。

この高度経済成長期には、各家庭の所得が増え、家族や子どもに関する意識の高まりが経済活動を通して表されていく時期である。例えば、松田道夫の『育児の百科』『私は赤ちゃん』、暮らしの手帖社の『スポック博士の育児書』などをはじめとするベストセラー育児書の相次ぐ発刊、「教育ママ」という言葉に表される教育に関心を持つ親の増加、1950年には42.5%であった高校進学率は、1970年には82.1%と20年の間に約2倍となる。

この時期は、子守り帯の開発・販売はまだ行われていないがアップリカ（1949年）コンビ（1961年）、子ども服メーカーのファミリア（1952年）をはじめとする子育て用品の企業が興された時期である。またその際に特筆すべきは、専門家による助言が企業の根幹に据えられていることである。アップリカであれば小児科医の内藤寿七郎氏を中心とした育児研究会を設立し、ファミリアであれ

ば神戸の進駐軍家族が住むアメリカ人主婦からの「新しい育児法」に啓蒙を受けるなど、海外と専門家によって「子どもにとって善きこと」がもたらされ、それを信奉した子育てのスタイルを確立するなど、子どもを中心とした近代家族の確立の時期といえることができる。

こうして、戦前では家庭生活における子どもの問題は優先順位が低かったが、高度経済成長を境に、子どもは家庭の中心的存在となる。その考えの表れとして子どもの特性に配慮したと思われる「子どものモノ」が大量に生産・販売されるようになったと言える。

（2）子育て用品の多機能化—1970～80年 簡便性+安全性+機能性

1970年半ばになると、スナグリという前抱っこ式の、これまでの紐ではなくバックル着脱の物がアメリカから輸入されたり、ウエストポーチタイプ（腰で支えて抱っこ）、メッシュタイプ（背中部分がメッシュ）、2wayタイプ（抱っことおんぶ）、3wayタイプ（抱っこ、おんぶ、横抱き）、などさまざまな機能を持つ商品が開発・販売される。

1975年には平均初婚年齢が上がり、合計特殊出生率は1.91となり、少子化時代が到来する。また、1980年代に入ると、1986年に施行された男女雇用機会均等法を代表として、働く女性の数と女性が働くことに対する社会認知が進んだ。つまり、この時期は夫婦ともに働き、家族や子ども、そして、女性自身の可処分所得が増え、自ら選択する「主体としての母」の登場としても捉えることができるであろう。同時に、これまでの専業主婦コースを歩む女性も存在するなど女性のライフコースも多様化された時期でもある。この表れとして、「子どもにとっての善きこと」に加え、多機能化による母親のための時短や移動距離の長さなど、TPOに即したモノの選択が可能となった時期として捉えることができるであろう。

（3）子育て用品のファッション化—1990年～ 簡便性+安全性+機能性+ファッション性

1993年にコンビが開発したニンナンナという子守り帯は、「コンビからおんぶ・抱っこの新しい提案です—赤ちゃんの体型に合わせて、使い方に合わせて選べるおしゃれで便利なニンナンナ」。「おんぶ紐やだっこ紐は使うお母さんにとっては安全性や機能性はもちろん、自分の服装とのコー

ディネートや使いやすさ、簡便さも重要なポイントです」「ニンナナンナはそんなお母さんたちのニーズに応えるファッションブル」+「手軽で便利に使える商品です」(1993年、コンビニンナナンナパンフレットより 図13参照)というキャッチコピーとともに発表された。それまでは子どもの月齢や発達に即して使い分けられていた子守り帯(おんぶ紐)であるが、ニンナナンナは産院からの退院時から、2歳頃まで使えるというロングスパンでの使用が可能であるという年齢幅の発達に合わせた機能の拡大という特徴を持つ。



図13 コンビ「ニンナナンナ」広告, 1993年



図14 1枚の布で子どもを包み込むスリング

それまで首の据わらない新生児を連れての移動は、ベビーカーもしくはベビーカーなどで寝かせ状態のものしかなかった。しかし、このニンナナンナは首の据わらない新生児を横抱きにするサポート機能が付き、産院の退院、健診、バギーのままでは乗りにくい通勤時の満員電車など母親の移動に即して作られていることが大きな反響を呼び、現在においてもこのタイプは人気を博している。また、外出の機会が増えることでそれまでは「子ども然」としたカラーリングやイラストがあしらわれていたものに対し、母親のファッショ

ンに日々合わせやすいカラーリング(紺・ベージュなど)、控えめなロゴ刺繍のみと、スタイリッシュなデザインとなっている。また母親のみならず父親も使用できるデザインとされており、共働きによる父親の育児参加の増加、エンゼルプランを嚆矢とする子育て支援施策や少子化対策などが次々と成立する背景ゆえのことであろう。

(4) ネットから広まるコレクションとメッセージ性—2000年—

簡便性+安全性+機能性+ファッション性 +コレクション性・メッセージ性

一枚の布で子どもを横抱っこで包み込み、ワンショルダータイプのスリング(図14参照)は、ブラッド・ピットとアンジェリーナ・ジョリー夫妻など海外の有名人らが使用していることなどから火が付き、布一枚をリングで締めるというシンプルかつおしゃれな子守り帯として人気を博した。シンプルゆえに気に入った布で手作りができるということで、自ら製作する保護者も出てきたが、ただ、布の中で子どもが不自然な姿勢によって股関節脱臼を起こしたり、シンプルが故に安全性に乏しく落下事故も散見されるようになる。また、エルゴベビーというハワイ発の肩と腰で子どもの体重を受けるアウトドアリュック様のオーガニックコットンで作られた子守り帯が輸入され、爆発的なヒットとなる。これまでのおんぶ紐を使用する母親の悩みは「肩の痛み」であったが、エルゴタイプは、この悩みを一気に解消した。こちらがアメリカの子どもサイズで作られており、帯の間から子どもが落下するなどの事故が報告されている。

国内メーカーのラッキー工業、コンビ、アップリカなどもスリングやエルゴベビー型の子守り帯の開発・販売に着手するが、こうした事故を踏まえた上で、自社の製品には安全性や日本人の子どもの体型に即した商品開発を行っている。

2000年以降、インターネットの普及によりさまざまな情報がすぐに手に入り、かつネット上でショッピングができるという手軽さは、海外の子育て用品の情報や、ネット限定商品の購入などが行うことができる。

例えば、スリングのネット販売を行うピーススリングHPでは「コーデネートを楽しんだり、シチュエーションを考えたり、出産前と変わらずファッションへのこだわりを持ち続けてほしい。い

いわゆる育児用品というものではなく、フレキシブルな洋服としての存在であるべきだというデザインコンセプトに基づき、ベビースリングは生まれました」とある。1990年代ではロングスパンで使用できる1商品というものが売りがであったが、2000年代ではよりファッション性重視が高まり、シチュエーションやファッションに合わせた商品を複数購入し、使い分ける商品構成が現れている。



図15 「エルゴベビー」のデコ

(輸入販売会社HPにて行われたコンテストで第1位のもの <http://www.dadway.com/>)

また、子守り帯に付随するグッズ(肩ひもに付けるよだれ除け、雨除けケープなど)でカスタマイズでき、かつそれらがネット限定やデザイナーズオリジナルなどのさまざまなバリエーションが存在し、さながら着替替え人形の洋服のような様相を呈している。さまざまな色や柄、アイテムを組み合わせることによってコレクター欲がかき立てられるのであろう。そして、オーガニック製品や手作りなど、エコやスローライフといった流行も含め、よりナチュラル志向な子育てというスタイルが流行となっている。

(5) 授乳服の現状

洋装の日常着化にともなって、授乳期にある母親も普段と変わらないおしゃれを好むようになってきた。また、授乳に伴う問題点の解決もデザイン性によって解決されるようになった。そのデザインは、次の4つのタイプに分類することが出来る。

- レイヤータイプ；お腹の大きいときから使用可能。マタニティウェアとしても着用可能。
- アンサンブルタイプ；授乳服ビギナーが使いやすい。
- カジュアルタイプ；授乳時期が終了しても

日常着として利用が可能。

- サイドスリットタイプ；ベビースリングとの併用が可能。添い寝での授乳も可能。

授乳服の選択は、授乳のし易さを第一に、安全性、洗濯等の手入れのし易さ、肌触り、おしゃれで授乳していることが目立たないように授乳可能であることが優先されている。更に、授乳服の購入についての調査によると、通販やネットショッピングによる購入が利用者の半数を占めている^[70]。

(6) 乳母車の現状

現在、乳母車には、子どもを寝かせた状態で使用できるA型と、簡易な形状に折りたためるB型との2種類がある。そしてA型は乳母車(キャリッジ)、B型をベビーカー(バギー)と呼ぶようになっている。発売当初はA型のみであったが、1967年にマクラーレン社が折りたためる型のベビーカーを開発してから、B型が世界中で使用されるようになった。

わが国では1949年の創設であるアップリカと、1961年の創設であるコンビとの2社の寡占市場であり、年間約60万台から70万台を占めており、その製品のほとんどがB型のベビーカーである。なお近年は、マクラーレンなどの欧米メーカーのデザイン性が評価され、次第に輸入量が増えている。

B型の普及の理由は、首の座る3か月くらいの乳児から使用が可能であり、折りたためることにより、特に車や電車への持ち込みが可能であるということだろう。子どもの首が座る3か月というのは、産休を取った母親が仕事に復帰する時期とも合致する。出勤するときに子どもを抱っこ、もしくはおんぶをするということは、ファッションを気にする若い保護者(多くは母親)にとっては、かなり負担感が強いと考えられる。それがバギーであれば、自らのファッションを楽しみながら、しかも移動が楽であるという利点がある。その意味では現在の働く保護者(主に女性)にとっては、バギーの存在は仕事と子育ての両立にとって便利な育児用品といえるだろう。

高度経済成長とともに、乳母車が徐々に安価なものとなり、一般に普及していったことにより、とくにバギーが電車や自動車でも使用されるようになってからは、伝統的なおんぶ紐(子守帯)に

取って代わる育児用品になっていったことが考えられる。仕事のための服装や持ち物が変化していく中で、抱っこやおんぶするというよりも保護者のライフスタイルに合わせた移動方法として、わが国においてもバギーが若い層に定着していった理由がここにあるといえるのではないだろうか。

図 16 は子守方法の変容により、子守服が商品化されていく過程を図式化したものである。

近代以降育児用品の商品化が進展するにしたがい、主に家人の生活用品や衣類を転用したり、家で「作るモノ」が主流であった育児用品の多くは、経済成長やライフスタイルの変化などにより「買うモノ（商品化）」へと変化していく。こうして子どもを育てるためだけの機能を持つ商品の開発に拍車がかかり、育児用品の機能がさらに充実し快適化していく。

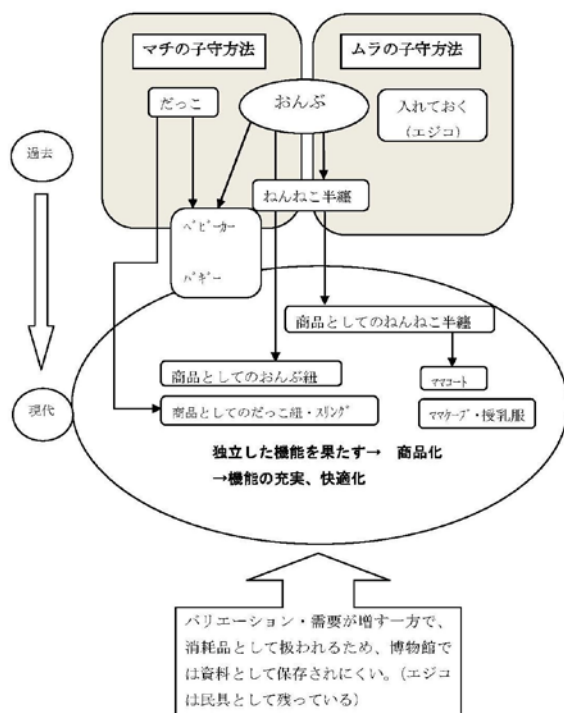


図 16 子守り服が商品化される過程

これまでの生活の代用品や育児の必要に応じて手作りされていたモノが、育児する当事者の手を離れて第三者（企業など）が便利性、機能性、ファッション性を高め商品化させていくに従い、保護者の「買うモノ（商品化）」への依存性を高めることになる。こうして育児用品は説明書なしでは使用が難しくなり、モノが育児を左右するように

なっていると思われる。

なお育児用品は商品化される以前において、使い捨てられることが多く、生活文化の資料として残存する例が極めて少なく、育児と育児用品の関係についての研究を困難にしていた原因の一つと思われる。

おわりに

これまでに検討したように、日本の代表的な子守方法として、抱っこやおんぶを挙げることができる。さらにかつての農（漁・林）村地域では、母親を含め、家内中が作業に出た後に子どもの子守をする人がいない場合にはエジコ（嬰兒籠）という道具が用いられていた。この3つの子守方法は、同じ子守であっても、その特徴や目的がわずかに異なっている。例えば、抱っこは長距離の移動や労働には適さないが、より育児に重点をおいた行為である。そして、おんぶは紐などで固定すれば、両手が自由に使える労働が可能になるが、背負った子どもの姿は見えない。さらにエジコは、見守る人がいなくても子どもが動かないように固定できる仕組みとなっている。これは当時の生活状況からして、そのような道具を使わざるを得ない労働の従事者である保護者や家の環境が反映されていると捉えられる。

日本の約70%が第一次産業に従事していた高度経済成長期以前においては、おむねおんぶやエジコを使用しながら、子守と作業の両立が図られていたといえる。その際、おんぶは家人のオビやヒモが利用されることが多かった。それらは子守用として独立した用途・機能をもっていたわけではなく、家人の生活用品の中から子どもを背負いやすい長さ、幅、素材のものを選び、いわば転用的に使用されていたのである。

しかし、高度経済成長期以降、保育所の増設や作業の効率化・機械化等により、子どもをおぶつての作業が減り、こうした社会変化は家庭への子守の方法の変化をもたらした。

おんぶは「労働のためのおんぶ」から「育児のための抱っこやおんぶ」へと変容していく。

経済的に豊かになることと並行して、家事負担が軽減され、その時間は子どもに向けられ、子育ては家庭の重要な位置を占める事柄となったといえるだろう。そして、育児用品は「作るモノ」から「買うモノ（商品化）」という要素を強めていく。それは、1970年代、育児用品を取り扱う会社

が複数出現し、子どものためのモノが、機能性・ファッション性を重視したおんぶ紐やスリング、ねんねこ半纏やママコート・授乳服が商品化され、売買されるようになったことからわかる。育児用品が商品化され、多様化、機能化されることは、ある意味で親子の生活を便利で豊かにすると言えるだろう。一方、それらは自らの子育ての必要感から作りだされたモノではない。他者から提供されるあふれるモノの中で、その使い方さえ教えてもらわなければならないという、逆説も生まれている。

育児用品の商品化と育児の関係を捉えた際、今日、他者から提供された商品としてのモノに依存する状況が形成されていると考えられる。このような状況での子育ては、便利さが近隣の人々とのつながり（子育てへの助言や援助など）を遠ざける結果となり、子育てで不安や孤立化を助長する契機となってしまうことなども憂慮される。子どもの成育環境の悪化が叫ばれる昨今、日本人の子育てをめぐる状況の変化をさまざまな角度から検証する必要性が高まっているといえるであろう。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所「共同研究プロジェクト」(K023)の助成を受けている。執筆にあたり、阿部(和)が全体の総括と調整を行い、各章を以下の通り分担した。

1, 是澤

2-(1) 加藤, 2-(2) 柴崎, 2-(3) 阿部(栄)

3, 坪井・阿部(和)

*1, 是澤は、一部は澤博昭他『子どもの探求』(世織書房, 2012年)を基に加筆。

*3, 坪井・阿部(和)は、坪井瞳「育児用品に見る子育て: 子守帯とベビーカーの発展から」(「子どもの文化」45号12号, 2013)を基に加筆。

注

[1] モース (Edward Sylvester Morse[1838~1925]) アメリカの動物学者、考古学者。

[2] モース(石川欣一訳)『日本その日その日』1, 平凡社東洋文庫171, 1970年, 11頁。

[3] 近藤真琴『子育ての巻』『明治保育文献集』1巻所収, 日本らいぶらり, 昭和52年。

[4] 『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻, 平凡社, 1984年参照。

[5] 黒田日出男『「絵巻」子どもの登場—中世社会

の子ども像』河出書房新社, 1989年, 62~63頁。

[6] バード (Isabella L. Bird[1831~1904]) イギリス生まれ。『朝鮮奥地紀行』『中国奥地紀行』をはじめ数々の旅行記を著す。来日は47歳の時。

[7] 高梨健吉訳『日本奥地紀行』平凡社東洋文庫240, 1973年, 94頁。

[8] 注2に同じ。

[9] 大藤ゆき『児やらい』岩崎美術社, 1968年。

[10] 九鬼隆一(嘉永5[1852]年~昭和6[1931]年)枢密顧問官, 男爵。文部省に入り帝室博物館総長などを歴任。

[11] 田中不二麿(弘化2[1845]年~明治42[1909]年)幕末明治初期の政治家。自由主義に基づく教育令を制定する。

[12] 『文部省第四年報(明治九年)』第一冊, 56頁。

[13] 渡邊嘉重(安政5[1858]年~昭和12[1937]年)茨城県生れ, 教育者。明治38(1905)年には私立常総学院を創立する。なお同書は、『明治保育文献集』4巻所収。

[14] モース, 前掲書, 102頁。

[15] バード, 前掲書, 222頁。

[16] 横山浩司『子育ての社会史』勁草書房, 1986年, 62頁。

[17] 横山, 前掲書, 63頁。

[18] 田中聡『衛生展覧会の欲望』青弓社, 1994年, 72頁。他に小野芳郎『〈清潔〉の近代—「衛生唱歌」から「抗菌グッズ」へ』講談社, 1997年参照。

[19] モース, 前掲書, 97頁。

[20] 星野楽子「児童衛生展覧会を観る」『幼児教育』(20巻11号)368~372頁。

[21] 同上。

[22] 竹原明理「展示装置としての生人形—衛生展覧会での展示をめぐる—」『日本学報』第29号, 28頁。

[23] 『日本民俗学大事典』吉川弘文館。1999, 「イジコ」項 蓼沼康子執筆

[24] 祖父江孝男ほか「エジコに関する文化人類学的研究—分布及地域的変異について—」人類学雑誌。1957, 66(2), 23頁。

[25] 柳田國男「つぐら児のこころ」『定本柳田國男集』31巻。筑摩書房。1970, 205~206頁。

[26] 23に同じ

[27] 文化庁文化財保護部『日本民俗資料事典』。第一法規出版社。1970, 「育児用具」項306頁。

[28] 民俗学研究所『改訂総合日本民俗語彙』第一巻。平凡社。1970, 「イジコ」項78頁。

[29] 大藤ゆき「イズミと子守」『児やらい』岩崎美術社。1968, 206頁。

[30] 青森県環境生活部県民生活文化課県史編さん

- グループ『岩木川流域の民俗』青森県. 2008, 「エンツコ」項 108~109 頁.
- [31] 石場家住宅 (弘前市亀甲町 88) 平成 24 年 11 月 筆者 (加藤) 調査による.
- [32] 青森県史編さん民俗部会『青森県史 民俗編 資料 南部』青森県. 2001, 「イズコ・エンツコ項」248 頁.
- [33] 青森県環境生活部文化・スポーツ推進課県史編さんグループ『下北半島西通りの民俗』青森県. 2003, 「エツコ」項 112 頁.
- [34] 24 に同じ, 21 頁.
- [35] 28 に同じ, 「エズメ」項 182 頁.
- [36] 『日本産育習俗資料集成』(底本: 恩賜財団母子愛育会『日本産育習俗資料集成』第一法規出版株式会社. 1975). 日本図書センター. 2008, 473 頁.
- [37] 36 に同じ, 476 頁.
- [38] 青森県環境生活部県民生活文化課県史編さんグループ『西浜と外ヶ浜の民俗』青森県. 2010, 「エンツコ」項 102 頁. および『日本産育習俗資料集成』(底本: 恩賜財団母子愛育会『日本産育習俗資料集成』第一法規出版株式会社. 1975). 日本図書センター. 2008, 「福岡県」項 483 頁.
- [39] 29 に同じ, 207 頁.
- [40] 32 に同じ
- [41] 30 に同じ
- [42] 38 に同じ
- [43] 33 に同じ
- [44] 30 に同じ, 「育児」項 109 頁.
- [45] 36 に同じ, 「乳母・子守・保育具」項 476~484 頁.
- [46] 29 に同じ, 209 頁.
- [47] 27 に同じ, 「育児」項 303 頁.
- [48] 24 に同じ, 29 頁.
- [49] 24 に同じ, 22 頁.
- [50] 須江ひろ子「エジコに関する文化人類学的研究—宮城県のエジコ使用地域における調査—」人類学雑誌. 1958, 66(3), 28 頁.
- [51] 30 に同じ
- [52] 24 に同じ, 27 頁.
- [53] 平成 25 年 8 月, 宮城県伊具郡丸森町の昭和 27 年 (1952) 生まれの男性より聞き取り. 筆者 (加藤) 調査による.
- [54] 本研究グループによる東京都心部における地域博物館へのエジコ所蔵状況調査, および田中本家博物館 (長野県), 京都府京都文化博物館, 京都府歴史博物館, 京都大学総合博物館などでの所在調査による.
- [55] 平成 24 年 11 月 青森県立郷土館 筆者 (加藤) 調査による.
- [56] 青森県立郷土館 古川実氏のご教示による.
- [57] 24 に同じ, 27 頁. 「エジコをカラにしておくことを良しとせず, その場合は小石やフトン, 刃物などを入れておくという. (秋田・山形・新潟・長野・福井)」, 「育ちをよくするために, 赤子を入れる前に丈夫に育った猫 (犬, 丈夫に育った子) を入れる. (青森・岩手・長野・山梨など)」, 「中の藁を火で焼くと子供が大きくなって火事に遭う. (秋田・長野)」など.
- [58] 加藤翠「わが国における乳母車の歴史的考察」日本女子大学紀要 家政学部第 22 号 1-10 (1975)
- [59] エフ・エッチ・ゲッセル著, 村田文夫訳『絵入子供育草』明治 7 年. 1874
- [60] ワルレン著, 石橋好一訳『小児養育談』. 1876
- [61] ルイス. フロイス著, 岡田幸雄注『ヨーロッパと日本の文化』岩波文庫. 1991
- [62] http://www.worldlingo.com/ma/enwiki/ja/Stroller_history 2011/03/03
- [63] http://www.worldlingo.com/ma/enwiki/ja/Stroller_history 2011/03/03
- [64] 的場銚之助編『育児の栞』大阪尚文堂. 1898
- [65] 田村貞策他著, 近代デジタルライブラリー. 『育児の務』博文館. 1908
- [66] 第 1 回児童博覧会 乃村工藝社. 1909
- [67] ラッキー工業 (株) へのインタビュー, 2011 年 1 月 21 日 (阿部・坪井)
- [68] コンビ (株) へのインタビュー, 2010 年 9 月 10 日 (阿部・坪井)
- [69] (株) アプリカへのインタビュー, 2011 年 6 月 23 日 (阿部・坪井)
- [70] 「授乳服についてのアンケート調査」(2004 年 4 月実施) 自然育児と暮らしのネットワーク, http://www.e-baby.co.jp/junyu_report/junyu_report0.html

Abstract

The purpose of this study is to partially explore childrearing values in modern Japan by examining changes in two familiar child-care customs, babywearing on the back (onbu) and babywearing on the front (dakko), as well as changes in child-care accessories such as baby baskets, baby slings, and strollers.

Onbu is a child-care custom that emerged among commoners in the Heian period out of the necessity of caring for infants while performing domestic chores. In the just almost 150 years since the start of the Meiji period, the Japanese style of childrearing evolved from “labor-oriented onbu” into “child-focused dakko.” Changes were also seen in the items used as child-care accessories. From the Meiji period to the early Showa period, child-care accessories for most Japanese were everyday items repurposed to serve childrearing needs. Following the end of World War II, however, information and culture from the West began to permeate popular society, and as these influences became widespread in the 1960s, child-care accessories transformed from items made at home to items purchased (commercial products).

Such abundant items can make life between parents and children convenient. On the other hand, these have not been created out of necessity for parents to raise their own children. Now, the reverse phenomenon occurs that they must be taught even how to use such plentiful commodities provided by others.

This has brought a childrearing form dependent on commodities, and it has become difficult to care for children without making use of commercialized products. The issues in this study should be considered seriously, especially in the deteriorated environment for childrearing today.

(受付日：2014年1月14日，受理日：2014年11月26日)

阿部 和子 (あべ かずこ)

現職：大妻女子大学家政学部 児童学科

日本女子大学大学院家政学研究科修了

専門は児童学，保育学。子どもの育ちをめぐる諸問題を子どもの自発性という視点から研究している。現在の関心は，子育てに不安を抱いている大人に，どのように子どもとの生活を作っていくのかを，子どもの自発性・主体性の育ちから考える視点を提供することである。本論文は，その研究の一環であり，研究全体の中で基本的なものとして位置づく。

主な著書：「子どもの心の育ち：0歳から3歳まで」「続子どもの心の育ち：3歳から5歳まで」（ともに単著，萌文書林），「乳幼児期の「心の教育」を考える—かかわりの中から見えてくる自己の育つみちすじ」（単著，フレーベル館），「保育課程の研究—子ども主体の保育実践を求めて」（共著，萌文書林），「家族援助論」（単著，萌文書林）ほか